

# 概説／入門書／研究概要の刊行

## 〈中国〉

橋本秀美

### 一 教科書・概説書

以前中国の大学では、教師が「講義」つまり授業の内容を文字にしたものを準備し、学校がそれを印刷して学生に配っていました。一枚一枚バラバラに配られ、学生が自分で綴じておくものですが、言ってみれば教科書です。専門の研究というよりは、概説的な内容のものが多かったのではないかと想像されます。内容の優れたものは、当時から評判が高く、学生もその「講義」を大事に保存し、後に影印出版されたり、整理して綺麗に版を組んで正規に出版されたものも少なくありません。しかし、大部分はすでに散逸して、見る事ができなくなっています。

昔はさておき、最近二、三〇年と言えば、大学の教科書の出版は一貫して重視されています。そして、大学の教科書は大部分が概説書です。同じ概説書であっても、大学の教科書と指定されたものは、それだけ信頼度が高く、よく売られ、よく読まれました。八〇年代および九〇年代初めまでのこの種の大学教科書は、多くの場合、先行同類書のない状況で作られた独創的なものです。しかも、学界を代表する優秀な学者が、大学教育課程での実際の使用を考慮して、最新の研究成果を踏まえつつ、できる限り全面的に、系統的に説明できるように、工夫を凝らし、繰り返し検討を加えられたもので、多大の精力を注ぎ込んで書かれた立派なものが少なくありませんでした。これらは、一つの学校の教科書としてではなく、全国で広く使われたもの

で、現在に至るまで重要な参考書として読まれています。もちろん、授業の教科書として使われただけではなく、学生の自習教材として多くの読者を獲得しました。ただし、内容を無理やり枠組みに押し込んだようなものや、十分な研究の裏づけなく表面的体裁だけ整えたようなものもあるので、好い本ばかりだったというわけではありません。

ところが、授業の教科書としての需要は各大学にあり、各大学にはそれぞれ専門の研究者が居るので、八〇年代末期以降九〇年代を通して、多くの研究者が独自の教科書を書いて各地の出版社から出版しました。もちろん、それぞれ特徴・長短がありますが、概説の授業で教えるべき内容にそう大きな違いがあるわけではなく、大同小異である場合が少なくありません。これらの教科書も、公開出版物ですの、大抵は全国範囲で流通し、自習教材として読まれましたが、上述の指定教科書の類の版本を抑えて定評を得て長く広く読まれたものは多くありません。

九〇年代は、出版物の種類が飛躍的に増えた時代です。百花繚乱、ありとあらゆる本が、無数の出版社からうんざりするほど大量に出版されました。八〇年代までは、出版の許可を得るのが非常に困難でしたが、九〇年代特に後半以降は、出版許可はほとんど問題なくなり、経済的条件さえ満たせばどんな本でも簡単に出版できるようになりました。

一般向けの純粋な商業出版物も大量に現れました。中国で

は、出版物の内容に政治的な規制がありますが、大体は出版社で予想ができるような分かり易い規制であり、規制に引っかけなくても出版社は割りにあっけらかんとしており、しかも発売差し止めになったような本に限って海賊版が大量に出回ったりするので、印象としては日本よりずっと自由です。最近、あるアメリカ人が書いた江沢民伝が中国語に翻訳されてベストセラーになっていますが、編集過程で出版社によってカットされた内容が全体の五パーセント、これに対して、同じ本の日本語版は四〇パーセントもカットされているそうです。売り上げやクレームの形で現れる無形の社会的圧力を気にするあまり、万人受けの方向に自主規制が強く働いてしまう日本に対して、中国では、制度的な目に見える圧力は政治原則に関わる限られた部分だけで、それ以外は何事も割りといい加減なので、大きな自由が得られています。もちろん、学術関連の書籍では、出版はなおさら自由です。ここで、概説書・入門書には、「読者対象」という点から、二つの方向を見ることができま

す。中国の出版社がある種の本の出版を企画する場合には、必ずその「読者対象」が明確に考慮されています。どんな読者を想定して作る本なのか、ということ。概説書の場合、上に述べた教科書の類であれば、読者対象は「大学生及び一般愛好家」ということになりませんが、「一般愛好家及び大学生向き」として、一般人を主要な対象とし

て作られる概説書が多く出ました。実際には、この区分は、現在では以前ほど明確ではなくなっています。大学進学率は高くなっているし、一般といっても大部分の農民などはそもそもこの手の本と無縁ですから、大学生・大卒と一般の区別はあまり意味がないからです。しかし、概説書については、教科書類と一般向けでやはり異なる傾向を見取ることが出来ます。教科書類が全面性・系統性を重視するのに対し、一般向けであれば可読性・趣味性が問われます。装丁などを見ても、その差は明白です。概して、教科書類は以前どおりの堅いスタイルを守っているのに対し、一般向けは華やかに見て楽しいような作りになっています。

一般向けの本は、短いことも大事です。薄い・小さい・お洒落な可愛い本であれば、一般の読者が何となく買ってみようか、と思ってくれる。大学生や研究者ももちろん買ってくれます。すでに亡くなっている世代の有名な学者たちが書いた、一般向けの短い本が、こういう形でよく出ています。入門書のような概説書のようなもの、漫談風・随筆風のもの、などもあります。必ずしも一般向けに書いたのではなくても、有名学者が書いた短くまとまった名著であれば、同様の装丁で出すことができます。同じ本でも装丁によって売れ行きが全然異なるので、出版社が独立採算を強いられるようになって以降は、装丁の面で工夫を凝

らす出版社が増えました。広西師範大学出版社など、九〇年代後半に、すでに他で出版されている珍しくもない本にお洒落な装丁を加えて新たな読者を獲得し、急成長を遂げました。

ついでに、最近厚くなった本のことを書いておきます。個人の読者に気軽に手にとって買ってもらうためには、薄い本が有利ですが、最近逆に厚くなった本があります。これには二種類あり、一つは北京図書館出版社が最近出した『清人文集篇目分類索引』がその例ですが、六〇年代の旧版に較べてぐっと厚く重くなっています。旧版を影印しただけなので、内容・ページ数は全く変わりませんが、旧版が辞典用の薄い紙を使っているのに対して一般書籍用の紙を使っているからで、随分使いにくくなっています。これは、出版社の考慮が至らないための失敗作です。もう一つは、中華書局が最近再印した『尚書今古文疏証』『觀堂集林』『二程集』などがその例で、本来二分冊だったものが厚い一冊本に、四冊本だったものが二冊本に変わりました。これも出版社としては手間を省いた形ですが、あるいは、一頁一頁じっくり読む読者にとっては薄めの分冊が便利でも、書棚に備えておいて、引用の必要がある時だけ引っくり返すという読者にとっては、一冊にまとまっている方が便利、という事情を反映していると思われまふ。大学生や研究者の本の読み方が変わってきているということ

で、じっくり原典を読む人が減ったということとは、概説書や研究書がより大量に消費されていることと表裏一体の関係にあります。

最近、昔の学者の古い「講義」を探してきて、新たに版を組んで出版している出版社があります。これは、当時の大学の授業の内容を知る上で興味深いだけでなく、現在の我々が概説書・入門書として読むにも相応しいもの、と考えられ、注目すべき現象です。これらの「講義」の作者はいずれも著名な学者であり、その古典学に関する基礎学力の高さは概して現在の学者より高く、しかも比較的短い言葉で簡にして要を得た概説であるため、優秀な商品たりえます。現在の読者は、概説であることに興味を持つし、著名な学者の著作であることに安心感を持つし、短い本であることに好感を持つ。一方で、出版側としても、短ければ印刷経費が安く上がるし、昔の本だから原稿料も要らないし、しかも昔の有名な学者の書いたものだから、現代の学者が書いたものと違って、どこからも批判や不満の声が上がる心配がない。好いことづくめです。今のところ、天津古籍出版社のこのシリーズは、まだ種類も少なく、売れ行きも反響も今ひとつのようですが、恐らく編集・装丁があまりよろしくないのが問題で、その辺が上手く工夫されていけば、もっと売れていてもおかしくないと思います。従って、この種の「講義」の出版は、好いネタがあればこ

れからもまだ出るのではないかと思います。

また最近、いくつかの出版社が、「××十講」とか「××十五講」とかいったシリーズを出しています。これは、それぞれの専門分野の現在の有名な学者に、その専攻分野について書かせているものですが、うまい売り方です。タイトルを見れば、研究書ではなくて、カルチャーセンターの講義みたいな感じだし、十講で一冊なら一講は一冊の十分の一の長さだから、取っ付きやすい、しかも現在有名な学者が書いている、ということ、一般の読者の買う気を引く条件を満たしています。しかし、この類はすでに教科書類とは全く内容を異にしており、全面性や体系性への考慮を全くしていないものなので、ほぼ純粹に一般向け教養書と考えてよいと思います。

去年出た李零『簡帛古書与學術源流』は、教科書的「講義」の新しいスタイルの試みということで、十二講に分かれた講義内容本文の他に、各講の末尾に参考書リストと、関連文献資料原文を付録として載せてあり、興味があれば一歩踏み込んで関連文献資料原文を読み、さらに深く勉強したい場合には参考書リストを手がかりにできるといいうわけで、読者に効率的な学習ができそうな好印象を与えるものです。全体に、著者独自の思想がはつきり現れた個性の強い講義ですが、同時にこの領域の情報を全面的に紹介してあって、この強い個性と情報ツールとしての利便性が結

合している、というのが、高い市場評価を受けるポイントのようです。最近出版された葛兆光の本も、何の本かはよく見ませんが、各章の後ろに参関文献のコーナーを設けていました。李零の本の体裁を真似たものです。

## 二 入門書

門は一つでも、門に入る方向は多種多様ですから、一口に入門書と言えば非常に幅が広い。私が直接関与した例で言うと、私の先生が随分昔に『資治通鑑』の中から短い話を百個拾って、簡明な注を付けた本があり、これは一般向け教養書としてかなり売れたものですが、数年前に、この本を中・高校生向けに加工した本が出されました。原文と注はそのまま、各話の後に「誰々はどうしてこういうセリフを言ったのでしょうか？」といった他愛もない「思考問題」を付け、さらに一話ごとに挿絵を加えたものです。

このような加工によって、一般向けの教養書は、中・高校生向けの古典入門書として生まれ変わりました。古典は入試にも出るので、中・高校生の需要は大きく、同様の趣向の、挿絵入り訳注付きの古典入門書の類は、腐るほど出ています。

九〇年代末に大失敗した入門的出版物として、中華書局の『活頁文選』の企画は興味深い例です。これは、直接的

には六〇年代に成功した企画を復活させたもので、古典の篇章に解釈を加えたものを薄っぺらな冊子に編集して、次々と発行するものです。六〇年代あるいはさらに遡れば二〇年代以来のこの形式は、当時幅広い読者の支持を得ました。学校の教材として考えれば、それぞれの学校の教師がガリ版で作る資料と比べて、優秀な学者や編集者の編集したものが内容的に優れるだけでなく、印刷もより綺麗で値段も安い。一般の読者にとっても、良質の文化教養教材が、簡単に、しかも定期的に次々と手に入る。ということで、六〇年代あるいはそれ以前の、書籍流通が比較的困難で、しかも一般知識層の文化教養的関心が高い時代には、非常に歓迎されたわけです。これが、九〇年代末に復刊されると、予想したほどの読者を獲得することはできず、返品が山が築かれてしまいました。その理由を考えると、恐らく、一般の伝統文化に対する関心の変化と、消費習慣の変化が主要なものです。六〇年代の人々は、素朴でした。伝統文化や古典文学を極く自然に価値のあるものと考え、皆なんらかの形でそれを勉強することが、知識層の教養として当然のことと考えられていました。九〇年代になると、成人購買層は文革の文化空白を経て、古典文学への親しみが薄いだけでなく、それを今更少しづつ勉強することに興味を感じなくなっています。毎月薄っぺらな安い冊子を買って、少しづつ、系統的ではない教養を身につけ

ていく、という方法は、現代の消費者に購買欲を刺激するようなインパクトを与えない。それなら、多少高くても、綺麗な装丁でまとまった内容の概説書・教養書を買った方がいい、と思われるでしょう。時間をかけて古典の素養を身に着ける、といった方向は、金を出して物を買う、という模式に合わないようで、どうせ金を出して買うなら、それで何か一つの方面の知識が一冊の本の形で手に入る、という形でないといけないようです。その後、『活頁文選』の企画は、小学生・中学生・教師など目的をしばって、しかも入試に役立つという側面を強調する方向に活路を求めようになっています。この方針転換は、成功したようです。この例では、一般の読者消費者の教養書に対する需要の変化を見ることができません。

もうちょっと学問的な、研究に繋がっていくような入門書として、八〇年代には、程千帆・蔣禮鴻のような大家が若い人に読書の方法を説いた極々薄い本が何種類かありましたが、この手のものは最近かえってあまり見かけません。長期間の訓練を要求する伝統的な読書方法は、現代ではあまり歓迎されないようです。古いものでは『書目答問』や梁氏『近三百年學術史』のようなものが、現在では入門書として読まれているものと言えるでしょう。これらは繰り返し出版されています。史料紹介のような本は、八〇年代からずっと作られており、現在でもいろいろな方面

について新しいものが出版されています。「××史料学」「××文献学」といったタイトルの本は、同じ史料紹介でも、もう少し研究の方に一步踏み込んだものが多く、論文集のようなものだったりすることもあります。基礎的読書方法は論文を書いて研究成果を挙げるのに役立たないが、史料に関する情報は有用だ、というところでしょう。「××概論」「××導論」「××入門」といったタイトルの本は、古いところでは章太炎だの范文瀾だのものが今でも売られています。新しい人が書いたものは、敦煌学のように比較的新しい専門分野についてのものが多いです。この手の本は、有名な学者のものであることが条件です。そうでなければ売れない。そして、これらの入門書は、やはり一般読者の教養書として買われている場合が多いのではないかと想像されます。

研究に繋がる入門書と学術に関わらない一般向け入門書の間に、研究者あるいは将来の研究者に教養を提供する性質の入門書もあります。昔の『中国文化史叢書』がその例で、これは八〇年代にも九〇年代にもそれぞれ影印版が出て、かなりよく売れました。この叢書の中には、現在でも研究者必読とされる名著もあり、全体として程度の高いものですが、この叢書の本を読む人の大半は、恐らくその本の方面の研究を直接志す人ではなく、研究者ではあっても一般教養として知っておきたい、という気持ちで買ってい

る場合が多いと思われる。最近十数年の間にも、似たような叢書はいくつも作られました。どれも一冊一冊が短くまとめられています。日本でも翻訳が出版されているフランスのクセジュ文庫の中国語訳も出ていますが、あの類の短いモノグラフィ式の入門書叢書が中国学の領域でもいろいろと出版されています。これらはいずれも一般向けで、『中国文化史叢書』などよりはずっと簡略になっています。

『中国文化史叢書』などよりはずっと簡略になっていますが、内容はそれなりにしつかりしたものが多く、著名な学者が執筆している場合も少なくありません。最近のもので面白いのは『中国版本文化叢書』で、これは小型本ではなく、十数冊から成り、非常に豊富な内容を紹介したのですが、研究書というわけでもなく、しつかりした内容ながら気軽に読めるように書かれており、図版も豊富、値段も安く抑えてあり、よく売られています。軽い紙を使っている点も、お気軽感を強めています。版本を専門に研究するような人は現在ほとんど居ないわけですが、中国学の研究者であれば誰でも版本に関心を持つておかしくないし、研究者でない一般の読者にとつても、一種骨董文化的な魅力があるので、広く買われているでしょう。多くの読者は、この十数冊の叢書を目にしてはじめて、版本についてもいろいろと面白い問題があることを感じ取ったはずで、言ってみればこの叢書の出版がこの方面の内容についての読者の需要を新たに創り出したようなもので、出版業の角度か

ら見ても非常に成功した企画です。誰でも重要だ必要な要素があると思っている内容の本を出すのは、既成の市場に同類新商品が割り込んでいくだけのことですが、誰も思っていないような本を出して売れるならば、それは新たな市場の発掘・開拓ということになります。同時にそれは、文化的創造性を持った事業であるとも言えます。タイトルに「文化」と入っているのも、一般化への指向を表現しています。研究と違って、「文化」と言えば一般人のものであるわけで、つまりカルチャーセンターの「カルチャー」です。

### 三 研究概要

八〇年代から各種の学会が組織され、情報交換の場としての機能を果たしました。それぞれの学会が、学界動向等についての情報をそれなりに整理していたと思われる。その後一部の学会は、研究年鑑のようなものも編集しました。しかし、それほど大きな影響を持ったものではないようです。

九〇年代の学術規範熱で、先行研究の全面的吸収が要求されるようになり、研究概要と研究論著目録の類に大きな需要が生じました。日本の中国史研究概要である『中国学研究入門』は、九二年に中国語訳が出版されています。中

国でも随分早くから研究論著目録の類は各種編集出版されているのですが、『中国学研究入門』に相当するような研究概要は未だにないように見えます。九〇年代以後も、研究論著目録の編纂は特定の研究領域について編纂されたものが少数あるだけで、それほど盛んとは見えません。特に九〇年代後半以降は、研究者が自分の業績を挙げるのに忙しく、純粋に他人のために大人数で共同作業をするというのは想像しにくくなっています。今となつては、各種論文を全文電子化したデータベースが各種あり、論著目録に取って代わる勢いです。

研究者が専門の研究論文を書くという場合に、概説書は役に立ちません。研究概要はあり難いものですが、細かな専門領域の研究状況を把握するには概要では大雑把すぎるし情報もすぐに古くなります。結局は、全文データベースなどの方が実用的ということになるのでしょうか。

翻つて思えば、日本の『中国学研究入門』のような研究概要紹介の本こそ、随分特殊であるように思われます。日本の中国史研究は、日本の他の研究領域に較べても、集中度が特に高いと言えるでしょう。多くの学者たちが、かなり共通の問題意識を持つて、すでに得られた研究成果の上に立ってさらに前に進んでいくという形で、方向性がかなり明確であるように思います。だからこそ先行研究の全面的把握が強調され、研究概要も要領よくまとめられている

のではないのでしょうか。比較で言えば、中国の中国史研究はより雑然としているように思います。様々な人が様々な興味関心で様々な方法を試みている。あるいは、大学ごとに、師承系統ごとに、方法・方向がそれぞれ異なる。小さな研究分野に範囲を限れば別ですが、中国史といった大きな範囲で中国全体の研究概要をまとめることは、かなり困難なように思われます。ですから、研究指南の出版物としては、各種の史料紹介・解題の本が、研究の共通の出発点を教えるものとしてあるぐらいで、後は師友の間の情報交換や読書を通して研究の方向が決まっていくのではないかと思います。

ここで特に注目されるべきなのは、近代以来最近までの研究著作に対する整理です。近代以来の学術著作はまさに汗牛充棟ですが、この十数年来特に新中国以来の学術著作については、各分野の最も重要な著作について、ほぼ共通の一般認識が形成されてきています。これは、学术界と出版界を通して共通の認識ということですが、最近上海の世紀出版集団が出している『世紀文庫』、北京の中国出版集団が出している『中国文庫』などは、いずれも後世に残るような記念碑的重要著作を統一の体裁で出しているものです。商務印書館が長年に亘って出している『商務印書館叢書』も趣旨は同様ですが、近代のものが多かったのに対し、『世紀文庫』・『中国文庫』は新中国以後のものが中心

で、より影響力が強い企画となっています。この二つの文庫の成立は、出版社の集団化の産物でもあります。近年来、出版界の改革の一環として、複数の出版社の集団化が進められています。資材の共同購入などでコストを下げるといふ話は、どれほど現実的意義があるのか疑問ですが、このように複数の出版社の出版物が、統一の体裁で出版されるようになったのは、間違いなく集団化の成果です。これらの叢書に収められた本は、独創的であると同時に概説書として読むこともできるものが多く、最新の研究成果ではないものの、学界の常識を知ることができるので、入門・概説・研究案内の役割を兼ねているということができません。

#### 四 概説書刊行の背景

概説書は、一般に純粹の営利出版です。研究書は、個人あるいは組織・基金などの資金提供を得て出版されるのが普通ですが、概説書にはそういう経済支援がない場合がほとんどです。従って、概説書が出版されるには、それだけの市場の需要がなければなりません。

九〇年代の国学熱は、一挙に伝統文化への一般の関心を高めました。『陳寅恪の最後三十年』は、所謂ノンフィクションで、この民国の学者の晩年までの姿を描いたもので

すが、大きな反響を呼びました。この本を読んで古典学を志したという若い人もいます。やはり人間は何より人間に感動したり同情したりするので、その人間に興味を持って、初めて彼の学術にも興味を持つようになるのでしょう。ある出版社が昔の有名な学者の概説書をシリーズで出版する際、原書のタイトルを、「誰その語る何とか学」といったタイトルに統一的に変えた例があります。

例えば王欣夫の『文献学概論』だったら、それを『王欣夫の語る文献学』というタイトルに変えてしまうのです。中身は変わりませんが、タイトルを変えて一般の読者にも親しみ易くしようとしたものです。文献学という何だか取っ付きにくい感じがするけれども、王欣夫という人なら一人の人ですから、付き合ってみようかという気になる。出版社もいろいろと頭をひねって考えているわけです。いずれにしても、国学熱の影響で、伝統文化への関心が高まったものの、一般の関心は人物であり、文化であるに止まって、清代・民国の学者たちが研究した経学・文献学・史学などの実際の内容を理解しようとしたのはやはり研究者や一部の大学生に止まりました。ですから、伝統文化関連の概説書は沢山出版されましたが、大抵は昔の有名人の書いたものに止まりました。そこからさらに一歩進んで、多くの一般知識人が中国学研究の内容に対する関心をどんどん深め、それに応じて各種専門領域の概説書が次々に世

に問われる、という具合には事は運ばなかったように見えます。

研究者はと言えば、九〇年代から業績評価の圧力が高まり、学術の専門化も進みましたから、清代・民国の学者のような古典文献の基礎を改めて勉強しなおすという余裕はなく、昔の学者を凌ぐ広さと深さを兼ねた学識を身につけるのは困難ということになり、七、八〇年代のようにマルクス主義史観で学術上の階級闘争をする、というような明確な方向性もありませんから、個人で概説書を書くという強い動機はあまりありません。一方で専門の著作は少なからず世に問われるようになり、同時に学者の文集も大量に出現しました。学者の文集は論文集とは限らず、小論文に雑文・随筆のようなものを交えたものも沢山見られます。

この手の文集は、入門書的な読まれ方をすることが可能で、一般の読者にも広く受け入れられています。最近新しく書かれている分野ごとの通史のような概説書は、大抵が企画ものです。つまり、出版社なり研究グループなりが企画を立てて、執筆者を割り当てて書かせるというものです。この手の本は、広く薄く書いた論文の寄せ集めのようなものであったり、論文と感想文を足して割ったようなものであったり、概説としてのタイトルで買わせるものの、一気に通読させるような魅力に乏しく、読者の満足度は低いものが多いように思います。同じ企画ものでも、上

に挙げた『中国版本文化叢書』のように成功しているものもありますが、その内容がかなり読ませる面白いものになっていく最大の理由は、恐らく先行する同類の書籍がないことです。

出版を支えるのは金です。八〇年代は貧しく、本を出版するのは非常に困難でした。九〇年代の初め、本の値段がどんどん上がり、一般個人は購入に困難を感じましたが、九〇年代後半からは個人の所得も増え、一般の知識人が比較的気軽に本を買うようになりました。十数万円の自家用車がバカバカ売れている時代に、二〇元、三〇元の本は特に高いとは言えません。もちろん所得格差は大きいし、多くの学生たちにとって三〇元の本はひよこひよこ自由に買えるものではありませんが、都市で定期収入を得ている知識階層は、興味を引かれれば本を買ってくれます。一方、研究者の経済状況も好くなり、各種補助金などもあるので、研究書の出版は現在ではかなり容易であると言えます。概説書の場合は、企画ものであれば補助金があるので売れ行きを心配する必要はそれほどありませんが、そうでなければ、装丁から内容まで、読者の興味を引くような工夫を凝らす必要があります。

内容の面から言うと、昔の学者の書いたものは、基礎学力が高いので、現在でも十分閲読に堪える立派なものが少なくありません。文革後では、八〇年代・九〇年代初めに

教科書として編集された定評ある概説書は、現在でも基本となる必読文献です。最近十年のものは、専門性の高い分野についての概説書は、その分野で研究を進めていくためには必須のもの。そうでない一般的な分野での概説書は、最近種類が多く、いろいろと賑やかで、あれこれ眺めるにはよいが、研究のためには教養のために必読の重要文献というものは少ない。例外は多々あるでしょうが、おおよその印象はこんなところではないかと思えます。

葛兆光『中国思想史』という本は、数年前に第一巻を出し、二、三年前に第二巻を出し、非常に話題になって、よく売れもした本ですが、概説書刊行の問題を考える上で面白い例です。この本は、これまでの中国哲学史あるいは思想史が、歴史上有名な哲学者・思想家ばかり取り上げているのはつまらない、として、広く文人・宗教家はもちろぬ、無名の一般人まで合わせて、中国における思想の歴史を全体として新たに描きなおすんだ、という趣旨で書かれました。本の形まで一般の本とは違う正方形に近いものにして、とにかく既存の思想史の本とは違うんだ、という点を読者にアピールしました。この本を本棚に並べると、背丈は一緒でも奥行きが深いので、この本だけ前に飛び出てきます。私はこういう変わった形の本が嫌いなので、内容を見るまでもなく形を見ただけで買わないことに決めましたが、市場の反響は大きかったわけですから、アピール効

果はあったということでしょう。ただし、最近出た再版本は、おとなしく普通の本の形になったようです。宣伝効果はもう十分だということでしょう。この本は、一人の研究者がかなりの心血を注いで独力で書き上げた特色ある概説書で、しかも一般読書界を明確に意識して出版されています。専門の研究者の、このような本に対する反応は、大抵、奇を銜った邪道で問題にするに値しないと考えるか、細かな問題を取り上げて理解が誤っているあるいは浅薄であると非難するかぐらいだろうということは、著者自身も出版社も十分解っていたはずで、一般読書界にアピールできなければ、この本は失敗なわけです。この本は、学生が基礎知識を得るためのものでもなければ、今後の学者がさらに研究を深めていくというものでもなく、最終的に消費されるための商品です。ところが、この本は、大量の研究論文を参考にして書かれており、夥しい注があつて、それらの参考文献が一一挙げられています。これは研究書的な書き方で、一般向きの書き方ではない。この辺がちよつと微妙です。直接各種の原典を研究して新たな成果を出したというのではなく、各分野の研究成果を幅広く参照して新たな視点から組み直してお話を書いたに過ぎない、という評価も可能です。葛氏は、専門の研究者からはどう思われようと、あくまでも学者であつて、この本も研究著作として書いている。だから、こういう書き方は当然なのだ、

とも言えます。しかし、一方では、読者も単に目先の変わった読み物ということでは満足せず、通俗概説書の中にも研究書らしさを求めているのではないかと思われるのです。カルチャーセンターの講座は、学生でも喋れるような簡単な内容であっても、講師はやはり大学の教師や研究者でなければならぬ、というのと同じ理屈でしょう。一般読者が贅沢になつて、研究者の世界を自分たちの日常生活の世界の中に引き摺り下ろそうという欲望を持っているのだ、と言えるかもしれません。この点は、今後に繋がる一つの傾向として、気をつけておいてよいと思います。

マルクス主義の神通力が失われて、現在の中国学には誰にも認められる明確な方向性というものはありません。政治性のない客観的な知識を追求するのがより学術的だという雰囲気が強くなつていますが、その結果は学術が人々の生活との関係を薄め、学者はただの物知りに過ぎない、ということになり、一般人の関心呼びにくくなつていきます。目下のところ、多くの読者を得ることができず、趣味性や新奇さなどに優れた本が主であると言えます。これも、粗暴な市場自由主義が世界を覆っている現代の社会状況を反映した事態に違いありません。

最後に、出版・印刷の技術的問題について二点附記しておきます。まず組版について。およそ現代語で書かれたものであるならば、一般向けであろうが教科書であろうが、

概説書であろうが研究書であろうが、すでに簡体字横組み以外考えられなくなりました。民国の学者の書いたものでも、新しく組版されれば間違いなく簡体字横組みです。中華書局の『二十四史』まで簡体字横組みになる時代です。から、不思議ではありませんが、もうこの状況は動きません。これは、政策などの原因では全くなくて、ただただ、縦組みは売れない、という誰にも反論できない最も現実的な理由によつてです。次に、印刷技術について。活字鉛印は、二〇〇二年に中華書局が出した『沈曾植集校注』と『釋史』が最後となつた、と言われており、現在新規に出版される書籍は全て計算機で版が作られています。過去の版を増刷する場合には、紙型を使って版が作られるのが普通でしたが、最近では、これも、旧版の本を画像として読み込んで計算機で版を作る方法に取って代わられつつあります。文字情報に変換するのではなく、画像情報のまま版にしているので、一見したところ、紙型を使った印刷物とほとんど区別が付きません。現在のところ、新たに計算機で作る版は、昔の活字版に比べて明らかに見劣りしますが、画像読み込み方式の増刷は、劣化がないだけ、紙型を使う方法よりも優れています。